地歴公民(地理)　関西大学　全学日程（２／２実施）　１／２

＜全体分析＞

試験時間　60 分

解答形式

全問マーク式

分量・難易（前年比較）

○分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）

大問４題，解答数 40 で変化はない。全日程を通して大問４題，解答数は 40，45，50（１大問の解答数 10 または 15）のいずれかの構成で定着している。

○難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

標準的な設問もみられるが，難問をはじめ客観的な判断根拠に乏しい設問も散見される。また，大問および小問ごとの難易差が大きい。高校の教科書の範囲外の内容も出題され，近畿圏の私立大学では難易度が高い。

出題の特徴や昨年との変更点

日程による出題傾向に大きな違いはない。系統地理分野３題，世界地誌分野１題の大問構成の場合が多く，地理用語・地名の選択や，文・項目の正誤判定などの設問が中心となっている。地図や統計表，グラフなどが使用されることも多い。また，地形図や地理院地図の読図問題も，例年，複数の日程で出題されている。大学入試の問題としては稚拙な設問が多く，高等学校の教科書で学習した内容の定着を試すような出題が他大学と比べて少ないため，学力が得点に反映されにくい。新課程を踏まえた出題の変化などもなく，昨年との変更点はとくにみられない。

その他トピックス

とくになし。

＜大問分析＞

番号	出題形式	出題分野･テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
Ⅰ	マーク式	熱帯の自然や生活	熱帯地域についてのリード文が示され，土壌，気圧帯，風，降水，植生（サバナ，マングローブ），農業（焼畑農業，コーヒー生産量の推移）の特徴や，雨温図による都市判別などについて出題された。ほとんどの設問は，教科書レベルの標準的な知識で解答できるが，問９は客観的な判断根拠に欠け，都市の判別は困難といえる。	標 準
Ⅱ	マーク式	地域調査	地域調査をテーマとして，問１では伝統的祭事，地図記号，小地形，問２では長野県伊那市の地理院地図と旧版地形図（２万５千分の１，「伊那」，「伊那宮田」1977 年）が示され，公共施設の地図記号とそのサービスや，河岸段丘の段丘崖の数，斜面崩壊・土石流・氾濫が発生しやすい場所，活断層が延びる方向，景観やその変化のよみ取りのほか，月平均気温・日照時間，就業者割合の判別などについて出題された。地形図の読図技能と関連する幅広い知識を必要とする。問１(1)，(2)，問２(7)は，設問を解くのに必要な情報が適切に示されていないため論理的に解答を導くことが難しく，とくに問２(6)は伊那市と長野市の判別は不能といえる。	難
Ⅲ	マーク式	森林・林業	森林と林業についてのリード文が示され，森林の割合，ブラジルの熱帯雨林の名称，永久凍土層下のメタンハイドレート，広葉樹・針葉樹の特徴，中国での大豆需要の拡大と熱帯林の消失，熱帯の成帯土壌の特徴，世界の地域別森林面積の増減などについて幅広く問われた。多くの設問は教科書レベルの知識で対応できるが，問２の広葉樹・針葉樹の成長速度や細胞密度の大小，同じく問５の着火や燃焼時間の特徴など，入試問題では珍しい内容であり，やや判断に迷う設問といえる。	やや難
Ⅳ	マーク式	南アジアの地誌	南アジアについてのリード文が示され，インドの国土面積と人口，バングラデシュなどで近年急成長している製造業，パキスタンを流れる河川，スリランカで生産がさかんな商品作物，インドで生産量の多い工業製品の統計判別，インドの工業分布，バングラデシュの第１次産業，ネパールの山岳観光と民族，モルディブの地形などについて幅広く問われた。大学入試対策の学習をきっちりと行ってきた受験生にとっては，良心的な出題内容である。	標 準

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2025 年

＜学習対策＞

まずは教科書・用語集・地図帳などを活用し，基本から標準レベルの知識の正確な習得を行うこと。その上で，本学では発展的な内容のものも出題されるため，資料集・統計集などを使ってより詳細な知識の習得や最新の地理的情報に敏感になるなど，知識の幅を広げておきたい。地理用語・地名などを正確に覚えるのはもちろんであるが，学習を進めてゆく際には「なぜそのようになるのか」ということを意識しながら，さまざまな地理的事象の要因や背景などを理解し，論理的な思考力を身につけておくことが重要である。さらに，本学の日程を問わず過去問をできるだけ数多く解くことで，新たな知識の習得と実戦力の向上につながる。問題を解いた後は，必ず解説を熟読しその考え方を確実に身につけ，関連事項なども調べて知識の幅を広げることにも努めておきたい。

© 河合塾　2025 年